

勤労教育の指導法

大 坪 昭 裕

Method in Labor Education

Akihiro OTSUBO

序 論

本学の建学の精神は「礼節と勤労」である。昭和57年度に各学科の専門教育科目の見直しと検討が行われているとき、建学の精神の具現について重要な提言があった。それは、本学では昭和43年度から礼法教育を必修科目として実施してきたが、建学の精神のもう一つの柱である「勤労」についても、同じように必修授業科目に取り入れて勤労教育を行うべきではないかというものであった。

その結果、昭和58年度入学生から一般教育科目の中の総合科目として、従来通り「人間の研究Ⅰ」では礼法教育を、新たに「人間の研究Ⅱ」では勤労教育を全学科1年生に必修科目として設けることになった。その後、昭和63年度から授業科目名がその授業の内容を明確に表現するために「人間の研究Ⅰ」は「人間の研究Ⅰ（礼節）」に、「人間の研究Ⅱ」は「人間の研究Ⅱ（勤労）」に改められて現在に至っている。

1. 勤労教育の目的

勤労教育の目的は、一定の目的を目指してその実現のための計画を立て、道具や材料を駆使してその対象を変えていくという生産的・創造的な活動を通して、自己実現の喜びを知るところにある。そのために、肉体的・精神的苦痛を伴うのは当然であるが、それに耐えるそのことが、勤労教育の目的ではない。その苦痛は、自己実現のために乗り越えなければならない過程といえよう。

簡単に言えば「勤労教育の目的は、自己実現の喜びを知る。」ことにある。

勤労教育を受ける学生にとって、「自己実現の喜びを知る。」とはどういうことかと言うと、例えばみんなと協力してある作業をやり遂げることであろうし、つい私語したくなるのを我慢して作業することであったり、作業を億劫がらずに精出すこと等であらう。自己実現の喜びとは、それぞれの人があることを勤労を通してやり遂げようと念じて、それが実現したときにしみじみと味わうあの達成感や達成の喜びを指している。

この「勤労教育の目的」の中に「肉体的・精神的苦痛を伴うのは当然であるが、それに耐えるそのことが、勤労教育の目的ではない。」とある。勤労に携わると、どのような作業でも体力や精神力が必要になる。汗も出る。足腰も痛くなる。息も切れる。時には、どうしてこのような作業をし

なければならないのかと愚痴も出る。しかし、「勤労教育の目的」はそのような肉体的・精神的な苦痛を我慢するのが目的ではなくて、それを乗り越えた、その先にある「自己実現の喜びを知る。」ところにある。

2. 授業の内容

この科目は、本学の建学の精神の具現を目的とした科目である。

勤労の精神はわが国の産業・経済・文化等の発展の基本であるとともに、社会や家庭及び本人にとっても重要なものである。このように大切な勤労の精神の充実には、ただ知識の学習だけで体得することは難しく、知識と心と体とが一体となってはじめて体得できるものである。

したがって、この科目の内容は、実習と講義の二つの分野に分かれる。「晴耕雨読」という言葉のとおり、雨天の時は教室で講義を行い、その他のときは屋外で実習を行うのを基本としている。

① 実 習

実習を通して、仕事に臨む心構え、仕事の計画・手順や器具・用具の選択、仕事の進め方を学び、仕事を完成させたときの喜びや勤労の社会的意義を理解し、勤労意識の充実をはかる。

また、共同作業をすることによって、仕事に関する互いの協力の大切さを学ぶ。

(i) 作物栽培の実習

作物の栽培には、長い日時と多くの労力を要することを体験し、日常無関心でいる食物への理解を深くする。また、土に親しみ、食物を育てる実習により、将来教育者として、母親として、子女の教育への体験とする。さらに、人間が道具を創出した意義や道具を用いることによる省力と合理的な使用法を学ぶ。

(ii) 環境の整備

環境の整備作業により、職場における環境整備の重要性を理解するとともに、社会環境整備や奉仕作業の意義を体得する。

(iii) 作業計画書の作成

作業場所を班員で予め検分し、その場所の清掃をするために必要な用具の種類・数量を決め、どのような作業順序で清掃を行ったらよいか、そして、作業中に留意する点は何かなどについて、班員で話し合いながら「作業計画書」を作成し、指導教員が綿密に添削して完成させる。

② 講 義

講義は雨天の場合に教室で行うが、年間の講義時間数が確定しないので、各指導教員が次の各内容の中から選んで講義を行っている。

講義内容

- i 建学の精神について
- ii 勤労について
- iii 労働観について
- iv 勤労意欲について
- v わが国における女子労働市場の変貌とその背景について
- vi 働く女性について
- vii 女性の生涯学習について
- viii 労働関係の法律について

3. 勤労教育の指導法

① 実 習

実習の中の作物の栽培実習は、学校の実習農園で行う。実習農園は学生寮忍ヶ丘寮の裏と運動場の西側とにある。最初の授業時には実習農園の位置と学校周辺の様子を学生たちに呑み込ませるために、寮の裏の実習農園から運動場の実習農園まで徒歩で案内する。そのとき、寮の庭の植え込みや、途中の民家の垣根等、いろいろな植物に出会う。それらの植物名や特長を話しながら歩く。中には、九州では珍しいリュウキュウマメガキや雌雄異株の植物であるイチヨウ、カナリーヤシ（フェニックス）等がある。図書館北側の雌のイチヨウは国際交流センターの建物ができたため、国際交流センターの東側にある雄のイチヨウと隔離されて花粉の飛んでくる量が減って、銀杏の結実量が少なくなったこと、また、雄のイチヨウの枝は幹に鋭角につき、雌は鈍角につくことを体と両腕を使って説明したりする。3号館前の校門脇に3本と2本の計5本のクスノキの「孫生（ひこばえ）」がある。これは戦時中、この地が清武小学校時代、クスノキの大木が盗難に会い、その切り株から成長してこのようになったことを話す。学生たちは、今まで見たことはあっても知らない植物名が多く、植物名や特長を手帳に記録させながら歩く。併せて安井息軒先生の明教堂も見せる。

実習に入る前に学生に説明しておかなければならないことは、使用する用具の名称とその使用方法である。作業倉庫に収納されている実習用具の種類はかなり多い。用具が合理的に使用され、省力に役立ち、そして怪我をしないために、具体的・効率的な使用法の説明と危険防止法の説明が必要である。また、繰り返し実習用具を使用するので、使用後の手入れ方法についても、その都度具体的に説明する。初めて手にする器具を上手に使うことができるようになるには、その器具を使う経験を重ねるしかない。

（i）作物の栽培実習

作物の栽培実習の主なものは、ソラマメとサツマイモの栽培である。年度内の順から言うと、年度初めの4月のソラマメの収穫から始まる。このソラマメは前年度の10月末に、1学年上級の学生たちが播種し、中耕・除草等を行ってきたものを、次の学年の学生たちが収穫することになる。

恐らく、畑に入って作物を収穫するということは、殆どの学生にとっては、初めての経験であろう。作業に入る前に、1学年上級生が昨年度、丹精込めて栽培したソラマメを、育てるためには何の作業もせずに収穫することに感謝するように話して作業にかかる。

作業は、常時、1クラスの学生を5名ずつの班に分け、班毎に行動させる。畑に入り、ソラマメの莖を土から抜かないまま、莖に斜めに着いているソラマメのさやをちぎらせる。熟してさやが真っ黒になったものと、まだ緑色をしたものを区別してバケツに入れる。前者は乾燥させて、来年度の種子に、後者は食用にする。しばらく学生たちに収穫させた頃、さやを莖からどういう風にちぎると、楽にちぎれるかを尋ねる。

空を向いてさやが付いているからソラマメと言われるが、さやを握って上から下の方向に引きちぎると、楽にちぎることが出来ることを体験させる。さやをちぎり終わった莖を抜いて、根を揃えて畑の外に順次積み上げさせる。この莖はサツマイモの堆肥に使うことを説明すると、種子を採取した後の廃棄物である莖葉が改めてサツマイモの肥料になることに学生たちは驚くようである。収穫したソラマメは作業倉庫に持ち帰り、真っ黒に熟したものは広いブルーシートにさやのまま広げ、何日も日光で乾燥させる。十分に乾燥した頃、大勢の学生たちに、そのブルーシートに広げたさや

の上を歩かせて、さやをはじき剥かせて中の種子を出す。種子とさやを選り分けて、更に種子をブルーシートに広げて乾燥させる。この種子はポリエチレン袋に入れたものを、さらにダンボール箱に入れ、害虫の食害を避けるため冷蔵庫内で秋まで保管する。

さやの青いソラマメは、さやを剥き、実（種子）を取り出して、ポリエチレン袋に詰めて学内で頒布する。収穫をした学生たちは争って購入し、収穫の味を味わう。家族たちに対しては、あたかも自分たちが最初から栽培したかのような誇らし気な気持ちになるようである。この実習は運動場の西の畑と忍ヶ丘寮の裏の畑の両方で、各クラスとも同様な作業を行う。

ソラマメの収穫が終わると、次のサツマイモの植え付けに備えて、酸性になった畑を中和するために苦土石灰を撒布し、清武町内の農家に依頼して耕耘機で耕耘してもらう。耕耘終了後、学生にはこのことを説明する。

予約していたサツマイモの苗が届く頃、プリントを配布して、サツマイモについての講義を行う。植物としてのサツマイモの特性、サツマイモの植え方、生育と収量、わが国のサツマイモのおもな栽培品種、具体的な植え付けの内容、サツマイモに適した土壌、肥料の三要素、サツマイモの作物としての特徴等について講義する。そして本学では「直立植え」で植えることを説明する。また、サツマイモの種類は、ベニアズマが主で、時としてコトブキを栽培したこともある。

5月中旬になる頃、サツマイモの植え付けを始める。サツマイモの植え付けをするためには、平鍬を使って高さ30～40cm、幅70cmの約20mの長い畝を30cm間隔に作らなくてはならない。また、肥料を施さなくてはならない。

作業に取り掛かる前に、まず、平鍬の使い方を説明する。平鍬は刃が薄いので、耕すときに誤って足を切る危険がある。自分だけでなく他人を傷つけることもある。そのために他の級友と間隔を十分にとって作業するよう注意する。また、平鍬で土を耕したり、掘ったりするときは、鍬の刃を地面に平行に動かすように指導する。しかし、このことは初めての学生には大変難しく、つい鍬を振り上げて地面に打ち込んで鍬の柄の付け根を折ることがある。

肥料は堆肥30kg、複合肥料8－8－8を4kg、過燐酸石灰2kgとソラマメの緑肥を3畝分に使う。

サツマイモを植える畝には幅120cmの黒色のマルチビニールを被せる。これは日光を通さないため、マルチビニールの下に雑草が生えないこと、また、雑草が生えても黒色のマルチビニールが夏の太陽熱を吸収して畝の表面が高温になり、雑草が枯死する。さらに、畝の水分が蒸発せずに保持できるためである。

学生各自に平鍬を1本ずつ持たせ、肥料をバケツに班毎に分配し、ロープ4巻き、竹の棒10本、山鍬1本を一輪車に積んで畑に出かける。作業倉庫前を出発して、作業を終えて帰って来るまで一切無言を言い付ける。

畑に着くと、予め竹の棒に印を付けてきた70cm、30cmのゲージを使って、畝幅と溝幅を測り、竹の棒を山鍬で畑の両側に打ち込んでいく。その棒に結んだロープを張る。ロープを張り終わったら、70cmの畝幅の中央に幅30cm、深さ30cmの溝を掘っていく。学生たちはここで初めて平鍬を悪戦苦闘して使うことになる。溝が出来るとソラマメの緑肥を運んで、溝の中に茎が外にはみ出さないように長く敷かせる。その上に堆肥、複合肥料8－8－8、過燐酸石灰を撒布させる。肥料の撒布が終わると、平鍬を使って高さ30～40cmの畝を作る。平鍬で掘った土を積み上げていくのであるが、掘り上げた土が、鍬から離れなかったり、折角積み上げた土がポロポロ滑り落ちたりして、思うよう

に畝が出来ない。一人ずつ鍬を交代して要領を指導する。

畝が出来上がったら、マルチビニールを被せる。畝の一端に2名でマルチビニールの端を地面に押さえつけさせ、ロール状のマルチビニールの心棒の筒に竹の棒を通し、2名がその竹の棒の両側を歩きながら、マルチビニールを被せていく。被せたマルチビニールが風でヒラヒラ動くので、両側を数人で押さえる。そこでマルチビニールの両側に平鍬で土を被せる。このとき、被せる土の量が少ないとマルチビニールが風に飛ばされるので、たっぷりと被せるよう指導する。

マルチビニールがしっかりと被り、ロープを抜き取ったらいよいよサツマイモの植え付けである。学生たちには予め、自分の手を広げて人差指と親指を一杯に離したときの人差指と親指の距離を測らせておく。いくらかの違いはあるが、凡そ15cm位である。被せたマルチビニールの中央線上に株間30cm間隔でサツマイモを「直立植え」で植えていくが、株間30cm間隔は人差指と親指の間の距離の2倍で測りながら、深さ10cmの穴を人差指を差し込んで開けていく。その穴にサツマイモの苗を直立して差し込み、周囲を両手の指で押さえる。これでサツマイモの植え付けは終了する。学生たちは立ち上がって、植え付けたサツマイモが順調に育つかどうかの不安と、やっと苦勞して植え付けが終わった満足感の入れ混じった思いで、自分たちの班の畝をしばらく眺める。丁度、梅雨の頃の作業であるので作業が出来ずに、日程が延びてサツマイモの苗が弱ってきたり、植え付けが遅れたりすることもある。各学級の畝には、担当した学級名を書いた立札が立てられる。

サツマイモの植え付けが済んで梅雨が明け、根づいたサツマイモが成長し始めたときどうしても雑草が伸びてくる。しかも、すぐに長い夏季休暇がやってくる。夏季休暇前の1～2時間しかないが、サツマイモ畑の雑草抜きを行う。この時期は炎天続きの夏の真っ盛りである。「暑さに負けるか、自分に負けるか。」という激励を飛ばしながら平常より短い時間で作業を切り上げる。

9月の夏季休暇明けはサツマイモの蔓はかなり伸びている。畝の外で、伸びた蔓が根を出している。蔓返しや蔓切りの時期である。サツマイモは植え付けた時のままにしておくと、蔓が伸びて地面を這い、節（蔓から葉が出ている箇所）から根を出して、植え付けのときにサツマイモの苗を挿した個所の「いも」が大きくなならないし、また、蔓が、伸び過ぎると葉の光合成によってできた養分がサツマイモを太らせるだけに使われず、伸びた蔓の栄養に消費されるので、蔓返しや蔓切りを行うことを説明して作業にかかる。蔓返しは、蔓の根元から1本の蔓を辿り、他の蔓と交錯しているので、サツマイモのできている根元を抜かないように注意させて、絡まった蔓を解きながら蔓返しをしていく。そして長過ぎる蔓は鎌で切らせる。かなりの量の蔓を切り取ることになるが、この切り取った蔓はソラマメの播種の時の緑肥にするので、畑の外に纏めて積み上げさせる。

10月中旬になると、サツマイモの「いも掘り」の時期である。各学級は学生寮忍ヶ丘寮の裏の畑と運動場の西側の畑の2カ所にサツマイモを栽培した。本学には、2つの付属幼稚園と創立者が経営していた1つの保育園がある。その3園の園児たちが毎年、この時期になると「いも掘り遠足」に来る。そのために、校舎に近い忍ヶ丘寮の裏の畑のサツマイモは3園の園児たちに提供し、学生たちは運動場の西側の畑のサツマイモを自分たちで掘ることにしている。

いも掘りの時間は、初めから学生たちの気持ちは弾んでいる。半年近くかけて、畝を作り、肥料を施し、植え付けをし、雑草を抜き、蔓返しをしてきた自分たちのサツマイモの収穫である。作業にかかる前に、「いも掘り」の要領を説明する。いもを掘るためには、まず、蔓を切り取らなくてはならない。各班2名が鎌を使って蔓を切り取る。このとき、鎌の柄を短くもち、鎌の刃の付け根

に蔓を当て、鎌を引きながら切り、切り取った蔓は畑の外に纏めて積み上げるよう指導する。鎌で手や指を切らないよう強く注意する。その次の作業は黒いマルチビニールの取り除きである。この作業をするときは、土に埋っているマルチビニールの端を探し、静かに土を揺すり落としながら持ち上げ、巻き取っていくよう説明する。マルチビニールは地中に残っても腐らないので、小さな切れ端も地中に残さないよう注意する。マルチビニールは学校に持ち帰り、纏めてごみ収集業者に処理してもらう。

その次が、いよいよいも掘りである。畝の両側に沿って平鍬で畝を柔らかに耕し、いもを掘っていく。このとき商品価値が失くなるのでいもの肌に傷を付けないことを注意する。いもを掘り終わった畑は、レーキで平らにすることを伝える。

全員に平鍬、各班に鎌3本、バケツ5個、一輪車1台、レーキ1本を持たせて畑に行く。無言作業を指示するが、学生たちはかなり興奮している。畑に着くと、用心のため竹の棒で畝の間を叩きながら歩かせ、もしかしているかも知れない蛇を追い出す。学生には、作業中に百虫がいたときは、手を触れず、踏み殺すよう指示する。各班の3名が蔓の切り株を20cmくらい残して切り取ると、他の者は切り取った蔓を畑の外に運ぶ。畝の間に落ちているサツマイモの短い蔓や葉も拾わせる。もうその段階で、あちらこちらにサツマイモの肌が見えている。次いで、マルチビニールを取り除かせる。素手でいも掘りが始まる。無言作業を指示したにもかかわらず、歓声やいもの大きさや数を見せ合う声が聞こえる。掘り上げたサツマイモは、その場でいもの頭と尻尾の細い部分を鎌で切り落としてバケツにそっと入れる。バケツに入れたいもを一輪車に移し、レーキでいも掘りの終わった畑の表面を平らに均す。畑を出る前に、枯草を集めて丸め、これを「たわし」の代わりにして平鍬に付いた土を擦り落とさせる。このとき、水分で鍬が錆びるので青草を使わないよう注意する。作業用具の数の点検をして、作業倉庫前に帰る。作業倉庫前で収穫したサツマイモの中の、鍬で切られたもの、小さくして商品価値のないものを取り除き、土の付いたまま秤り分けて、ポリエチレン袋に詰め、学生や教職員に販売する。学生たちは買い求めていく。

2つの付属幼稚園と1つの保育園の園児たちの「いも掘り遠足」は各園の都合で、日程はまちまちである。土曜日を除き毎日何れかのクラスの人間の研究Ⅱ（勤労）の授業が3人の教員によって行われているので、3園が希望する日の「いも掘り遠足」を受け入れている。3園が「いも掘り遠足」に来るまでに、忍ヶ丘寮の裏の畑のサツマイモの蔓とマルチビニールを園児たちのいも掘りをしやすくするために取り除いておかなければならない。都合のつくクラスがその作業を行い、「いも掘り遠足」に来る園児数に応じて、畝の数を配分して標識を立てておく。3つの園の「いも掘り遠足」の日時と授業時間が合うクラスの学生たちが園児に対応する。学生たちには、園児のいも掘りであって学生たちのいも掘りではないこと、園児が年齢別でどのような行動をとるか観察することを指示する。

園児たちが「いも掘り遠足」にやってくる日は、可愛い園児たちに接する喜びと、自分たちが栽培したサツマイモを掘ってもらうのだという幾許かの誇らし気な気持ちでワクワクしている。学生たちは「いも掘り」をしてはならないということを指示されているので、「いも掘り」を始めた園児たちの前に屈んで見ている。どこを掘ったらよいか分からない園児に、サツマイモが埋まっている場所を教えたり、サツマイモの顔が見えてきたのに、どうして掘り出してよいか分からない園児と一緒にいもを掘ったり、掘り上げたいものが大きいのを大仰に驚いて見せたりして大変賑やかであ

る。いもを掘り終わって虫取りに夢中な園児と虫と一緒に探している学生もいる。じっと動き回る園児を目で追いながら、一生懸命に手帳に何かを書き付けている学生もいる。園の先生方を手伝って掘り上げたサツマイモをダンボール箱に詰めて一輪車でバスに運ぶ学生たちもいる。学生たちの実習日誌に、その日の園児の観察を詳しく記録させる。

「いも掘り」が終わると、ソラマメの播種を始める。ソラマメは11月初旬に播種し、途中、除草を行いながら育て、翌年の4月下旬に1学年下級生が収穫する。いわば、上級生から下級生へのプレゼントである。

ソラマメの播種の要領は大凡サツマイモの植え付けのときと同様である。ソラマメの播種の前に学生に要領を説明する。畝幅は80cmの平らな畝、畝と畝の間の溝幅は50cm、畝の高さは15～20cmとする。サツマイモのときの畝の高さが30～40cmであったのに対し、ソラマメの畝の高さが15～20cmであるのは、サツマイモが水捌けのよい土地を好むために高くしたこと、畝幅をサツマイモの70cmに対しソラマメを80cmにしたのは、サツマイモは高い畝の頂上に苗を1列に植えたが、ソラマメは80cm幅の低い平らな畝に2列に播種することを学生たちに詳しく説明する。

作業に取り掛かる前に、改めて平鋤の使い方を説明する。平鋤は刃を地面に平行に動かして使うこと、自分の足は勿論のこと近くの他の人の足を怪我させないように、十分間隔を取ることを注意する。

肥料は1畝分として複合肥料8－8－8をバケツ1／2、過磷酸石灰をバケツ1／3、堆肥をバケツ2杯とサツマイモの緑肥を使う。

ソラマメの播種には幅120cmの透明のマルチビニールを被せる。サツマイモのときに黒色マルチビニールを使ったのに対して、今回、透明なマルチビニールを使うのは、日光がよく透って冬期にも地面をよく温めること、夏期に栽培するサツマイモのときと異なり、透明であっても冬期はマルチビニールの下に雑草が生えにくいためであることを学生に説明する。

学生各自に平鋤1本ずつを持たせ、肥料の入ったバケツを班毎に分配し、ロープ4巻き、竹の棒10本、山鋤1本を一輪車に積んで畑に出かける。帰って来るまで無言を堅く言い付ける。

畑に着くと、予め竹の棒に印を付けてきた70cm、50cmのゲージを使って、畝幅と溝幅を測り、竹の棒を山鋤で畑の両側に打ち込んでいく。その棒に結んだロープを張る。ロープを張り終わったら、80cmの畝は幅の中央に平鋤の横幅2枚分の幅で深さ30cmの溝を掘っていく。一度経験があるとはいえ、まだやはり、ぎこちない手付きで平鋤を使っている。溝が出来るとサツマイモの蔓を運んで、溝の中に長く敷かせる。蔓の上には堆肥、複合肥料8－8－8、過磷酸石灰を撒布させる。肥料の撒布が終わると、平鋤を使って高さ15～20cmの平らな畝を作る。サツマイモのときの蒲鉾型の畝に比べると作るのは楽である。畝が平らにならないときは、2名で畝をはさんで平鋤の柄の端を持ち、平鋤の柄で凸凹の畝を均すと楽に平らに出来る。

畝が出来上がるとマルチビニールを被せる。サツマイモのときと同様に、畝の一端に2名でマルチビニールを押えつけさせ、巻かれたマルチビニールを解きながら被せていく。被せたマルチビニールが風で動くので、両側を数人で押さえる。そこでマルチビニールの両側に平鋤で土をたっぷり被せる。

マルチビニールが被り、ロープを抜き取ったら、ソラマメの播種である。肥料を入れた溝をはさんだ位置に、ジュースの空き缶の口を切り取ったものを逆さにして、マルチビニールの上から押し

込み、広げた手の人差指と親指の間の距離の2倍の間隔で穴を開けていく。そのときくり抜いた円形のマルチビニールは畑に残さないように拾っていく。その穴の中にソラマメの種子を3粒ずつ重ならないように落とし、これでソラマメの播種は終了である。10日もすると発芽する。12月から2月にかけてソラマメ畑の様子を見ながら、雑草の除草、剥がれたマルチビニールの土被せ等を行う。

(ii) 環境の整備

環境の整備は、主として学校内外の清掃と樹木の剪定等である。この作業はソラマメやサツマイモの栽培の時期以外の雨天でない日に行っている。最近、学校は業者に委託して植木の剪定をしたり、芝刈機の騒音が大きいので事務職員が授業の終わった放課後に芝刈りを行うため、学生に樹木の剪定や芝刈りをさせることが出来なくなった。そのため、環境の整備といえば清掃が主になった。しかし、学内外を日常見ていると、どうしても人の手で行わないと整備出来ない個所が多い。中でも普段、人の通行しない目立たない個所で汚くなっているところがある。放っておいても、清掃整備しても学校生活や活動に何等支障のないところである。このような個所の清掃整備が勤労教育の掛替えのない指導の場所である。校舎と垣根の間の落ち葉や雑草の除去、校舎の周りの雨水側溝（うすいそっこう）の中の清掃、広い芝生の中の小石拾い、学校前の道路両側の落ち葉集め、バス停留所の石畳の間の除草、道路脇の土手の雑草の除草、アメリカディゴの枝下ろし等限りがない。これらの清掃を行うとき、初めのうちは使用する器具・用具、器具・用具の使い方、清掃の仕方、怪我をしないための注意を行って作業に掛からせる。殊に用具・器具を効率的に使用することは作業の省力化に役立ち、短時間で作業を終わらせることが出来ることから、作業前に、その器具・用具を使用する目的や使い方を詳しく説明する。若い女子学生であるために、作業をしている自分に注がれる周囲の目を気にして不必要なコンプレックスを感じたり、その清掃作業をすることの意味や喜びを味わえない者もいるので、その度ごとに、その日の作業の目的を具体的に話してやる必要がある。例えば、夏期休暇前の学内清掃であること、入学試験で受験生や父母・付き添い教師を迎えるためであること、新しい年を迎えるためであること、卒業生を気持ちよく送るためであること、何よりも普段のみんなの学校生活が清々しいさわやかな場所で行われるためであることを懇々と話して聞かせる。「今日みんなが清掃した場所は清掃をしてもしなくてもよい場所だった。だけど、その場所は汚くて誰かが清掃をしなくてはならないとしたら、放って置くか、手を出すか。」「拾っても、拾ってもゴミや吸殻が散らかっている。捨てなければいいのに、捨てた人が掃除をすればいいのにと怒らないで、ゴミや吸殻を捨てられても、捨てられても黙って拾い続ける気持ちにはなれないか。」そのように問い続けていく内に、学生たちは今までとは違った大らかな心に変わっていく。

また、この環境整備に伴う清掃は、学生たちに作業場所だけを指示すると、使用する器具・用具の種類、数量、作業順序、作業方法を自分たちで話し合い、自分たちで時間内に効率よく清掃できるようにするのが最終的な目的である。そのためには、別途の訓練が必要になる。

(iii) 作業計画書の作成

先に述べたように、このことは作業場所を班員で予め検分し、その場所の清掃をするために必要な用具の種類・数量を決め、どのような作業順序で清掃を行ったらいいか、そして、作業中に留意する点は何かなどについて、班員で話し合いながら作業計画書を作成するものである。

作業場所は講義室、器楽練習室5室、本館玄関、記念館食堂1階フロアー、1号館2階学生用ト

イレ、体育館1階フロア等である。

これは、雨天の日に屋外の作業が出来ないとき、都合2時間かけて行う。私たちは、ある纏まった仕事をするときに計画書を作成することがある。しかし、家庭生活で掃除をするときに作業計画書を作成するような大仰なことはしない。また、家庭の主婦が夕食の献立を立て、冷蔵庫の食材を勘定に入れて、その日買い足さなければならないものをメモしたりして買ってくる。そして、洗濯その他の家事を同時進行させながら夕食を調理する。そのときも主婦は計画書のような大袈裟なものを作成しない。計画書はその主婦の頭の中であって文書に表したものはない。これを文書に表して、指導者が添削をして、現実的で合理的な作業を行おうというのである。

使用の目的に合った作業用具の選定、その用具の使用法、作業の順序、作業方法等を班員で話し合っていくが、まず、作業用具の名称に行き詰まる。机上の空論ではなく、現実的に問い詰めていくと、今迄考えもしなかった細かなことが沢山でてくる。

これらを討議し、指導者が添削していくことで、学生たちで計画を考え、学生たちで作業ができるようになる。

② 講義

講義は授業が開始された初めに、「勤労教育の目的」や「勤労のこころ」について詳細に説明するが、学生たちは高等学校までに受けた教育の中で、経験しなかった授業科目であるため、大学に入学してから何故このような授業が必修科目として行われるか理解出来ないようである。建学の精神とはどういうものか、礼節と併せて、勤労が人間生活でどういう意義を持つものか、そして、本学で行われる勤労教育の目的は何か、そのために培って欲しい勤労のこころとはどういうものかについて説明する。また、実習では作物の栽培実習としてソラマメとサツマイモの栽培を行うことで植物や食物を育てることへの理解を深めること、環境の整備として学校内外の清掃整備を行うことで社会環境整備や奉仕作業（ボランティア活動）の意義を説明する。

止むを得ず雨天のために実習が出来ないときには、先に挙げた講義内容による講義を行う。

③ 実習日誌

実習を行ったときには、翌日、実習日誌を提出させる。実習日誌には、実施期日、実習地、実習の内容、勤労の反省、今週の研究事項に分けて書くように指示してある。

実習の内容の欄には実習の内容だけでなく、その日の作業の目的や要領、その他指導者が話したことも記載させる。そのことで、学生が勤労の反省を書くときの大事な観点や主題を与えることになる。しかし、初めのうちは勤労の反省の文章は短く、自分を見つめた事柄を具体的に詳細に書くことが出来ない。大方は、勤労の反省ではなく、実習で行ったことの機械的な事実の羅列に終わっている。年間約20回、全員の実習日誌を読むことになるが、多くの誤字の訂正、当然漢字で書くべきものを仮名で済ませている単語の記入等を行いながら、丹念に読んでひとり一人に数行のコメントを書いて捺印していく。決して、読んで捺印するだけで終わることはしない。中には早い段階から、真剣に自分と対決し、しっかりした長文の勤労の反省を書く者もいる。文章や記述内容に一つの山が出来て、それについて読み応えのある文章が書けるようになるのには半年以上かかる。実習日誌を読んで出来るかぎりのコメントを書くのはひとり一人の学生との真剣勝負である。年間、同一学生の実習日誌を約20回、読むではコメントを書いて心が通じていく中で、学生たちは目覚ましく成長していく。

④ 勤労への考えの変化

毎年、1年間の授業が終わりに近づいた頃、学生たちに授業時間を使って「私の勤労に対する考えは変わっただろうか。」というレポートを書かせる。このレポートの冒頭で「変わった、変わったかどうか分からない、変わらない」の何れかを○で囲ませて、以下の文でその理由を具体的に書かせ、「変わった、変わったかどうか分からない、変わらない」の何れを選んでも、その理由の説明が説得力を持つものであれば上位の点を与えることを伝えておく。

殆どの学生たちは、この授業が始まった頃は、何故大学に入学してこのような科目が必修科目としてあるのか、どうして大学の専門の学科で履修しようというのに農業の真似事をさせるのか、実習だけならまだ我慢できるが、何故、実習を行う毎に実習日誌を提出しなくてはならないのかと不平不満は様々である。そして指導者との、あるいは自分との長い戦いが続く。

平成4年度から平成9年度までの「勤労に対する考えの変化」の状況は、表Ⅰの通りである。

表Ⅰ 勤労に対する考えの変化

	平成4年度		平成5年度		平成6年度		平成7年度		平成8年度		平成9年度	
変 っ た	73名	97%	93名	93%	74名	100%	65名	84.4%	69名	92%	62名	84%
変わらない	0名	0%	4名	4%	0名	0%	6名	7.8%	1名	1%	0名	0%
分からない	2名	3%	3名	3%	0名	0%	6名	7.8%	5名	7%	12名	16%
計	75名		100名		74名		77名		75名		74名	

「変わった」という学生たちの、具体的な変化の様子は次のとおりである。一つは自分の性格の変化である。今まで、どんなことでも中途半端であったのが一つのことに集中して、最後までやり遂げるようになったり、誰かがやってくれるだろうという考えがなくなり、その誰かに自分がなくてはならないことを痛感したり、どんな仕事にも積極的になって、今ではそうすることが当たり前になったという。二つ目は勤労のこころの変化である。それは自分たちが掃除をしてきれいになったことを他の人が気付いてくれなくても、他の人が気持ちよくなるために精一杯のことをしたということ満足するという、今までと違ったこころを持つようになったことである。三つ目は自分たちが作業した場所を振り返ってみると、何かとても嬉しいなと感じることが増えてきたという自己実現の喜びである。四つ目は何かを育てるとき、新しい命を生み出すとき、一つひとつを丁寧にやりこなし、愛情を注ぎ、大切に育てることを実感したという仕事への愛情である。五つ目は、自分も何か出来ることはないか、自分も何か役に立ちたいというボランティア精神の芽生えである。六つ目は無言作業をしていると、人がいま、何をして欲しいか、人が何に困っているか、自分が何をしたらよいか分かるようになったという無言作業の尊さの体得である。七つ目は自分も家族の一員なのだから、素直に家庭の仕事に取り組めるようになったという助け合いのこころの体得である。そして最後に八つ目には今までコンプレックスを抱いていた父の職業を心から尊敬するようになり、これまで以上に高まってきた両親への感謝の気持ちである。

そして、「今は、この授業で学ぼうとした勤労のところに到達できたとは言えない心境であるが、この授業が終わってから、あるいはもっと年数が経ってから、勤労のころとは、ああこのことだったのかと分かる時が来ると思う。」と学生たちは考えている。

結 び

勤労教育は礼法教育と並んで、ともに人間教育である。勤労教育では、その目的である「自己実現の喜び知る。」ために、植物栽培実習、環境整備実習等を通して、学生たちがしっかり自分を見つめて自己管理を行い、心身の苦痛を耐え忍んで乗り越え、学友たちと助け合う温かな心を培っていく。そして、将来、家庭や社会を支える確かな力となって、黙って他人のためにはたらき、その人たちが喜ぶのを自分の喜びとして、自分の仕事に深い愛情を持つような勤労の心を育てることが勤労教育指導の念願である。

[1998年11月30日受理]